

主 題：空っぽの哲学か？満ち満ちたキリストか？

聖書箇所：コロサイ人への手紙 2章8－10節

テーマ：空っぽのこの世の哲学に騙されず、満ち満ちたキリストに根ざして歩んでいくこと

きょうはタイトルにもあるように、「空っぽの哲学」また「満ち満ちたキリスト」について、コロサイ2：8－10からともに考えてみます。まずその前に、一つ質問があります。皆さんはハイキングや山登りは好きでしょうか？私自身は、最初は全く好きではありませんでした。きつい山道を歩くだけの苦痛を、なぜわざわざ自分に課さなければならないのかと思っていたりもしました。今は違いますが。皆さんはどうですか？「ハイキングや登山が良い運動になるだけではなくて、美しい自然や景色を楽しむことができるからこそ大好きです。」と言われる方が多くおられるかもしれません。確かにこれらには良い点もたくさんあります。でも一方で、ハイキングや登山が大きな悲劇になりえることも、ニュースを通して私たちは目の当たりにすることがあります。実際、警察庁の調査によると、昨年山で遭難した人は3506人、うち死者・行方不明者は320人を超えていました。では、このような遭難の理由として最も多いものは何かご存じでしょうか？それは“道に迷うこと”でした。もちろん、道に迷うと一言で言ってもいろんな理由があります。ある人は、自分がどこにいて、どれが正しい道なのかがわかっていないのに、ここを下っていけば大丈夫、何とかなると思い込んで、結果、森の奥へと迷い込んでいってしまうことがあります。またある人は、自分自身の疲れと目の前に続いているきつい道を比べて、正しい道を進んでいくことよりも、楽そうな道を選択した結果、迷って崖から落ちてしまうようなこともあるのです。こうして正しい道だという勝手な思い込みや過信、楽な道への妥協というのは、時に深刻な結果をもたらすことがありました。

そして、それは登山やハイキングに限ったことではありません。信仰者の日々の歩みにおいても同じことが言えるのです。私たちの信仰生活においても、時に目の前に続く狭く辛そうに思える道があり、代わりにその脇道に広がっている、容易に見えるものに出くわすこともあります。でも、どれだけ脇道が魅力的なものに思えたとしても、正しい道からずれてしまえば、最後には大きな過ちや罪に陥ることがあるのです。箴言16：25にもこんなことばがありました。「人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。」と。ですから、私たちは間違った危険な道に足を踏み入れるのではなくて、たとえ厳しくても、たとえ難しくても、正しい安全な道を進み続けていくということが必要なのです。そしてこれこそ、今私たちが見ようとしている8－10節でパウロが教えていたことでもあるのです。

少し思い出してみてください。先週私たちが見た6－7節では、パウロは、主キリスト・イエスを信じ受け入れたクリスチャンがキリストにあって歩み続けていく、ということを求めていました。一歩正しい道に踏み出した者たちがそれを止めるのではなくて、そのまま継続して歩み続けていくように、と言っていたのです。パウロはそれを6－7節で語った後で、続く8節から、今度はその正しい道を妨げようとする危険な脇道について触れていました。コロサイの兄弟姉妹たちのことを欺いて、彼らを正しい道から逸らすような誘惑、偽りの教えというものが実際に存在しているのだと警告していたのです。そして、これから見ていくその危険こそ、「むなしい、だましごとの哲学」と言われるようなものでもありました。パウロは、愛する信仰者のひとりひとりが決してそういったものによって惑わされないようにと気を配っていたのです。だからこそ、彼らが正しい道を決して見失わないように、まず遠ざかるべき危険なものを教えて、その代わりに、彼らがずっと頼りとするべき安全なものを教えていたのです。これから私たちが見ていくのは、まさにそれら二つのポイントです。危険なものがいったい何なのか、

そして、安全なものがいったい何なのか。もう少し具体的に言えば、「空っぽの哲学の危険性」と、そして「満ち満ちたキリストの安全性」です。では皆さん、いったいどんな危険が信仰者の周りに実際に存在しているのか、またどんな安心をキリストのうちに見出すことができるのかを、自分自身のこととして一緒に考えてみましょう。

コロサイ 2 : 8 - 10

「:8 あのむなし、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。それは人の言い伝えによるもの、この世の幼稚な教えによるものであって、キリストによるものではありません。:9 キリストのうちこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。:10 そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。」

○空っぽの哲学か？満ち満ちたキリストか？

パウロはまず、「空っぽの哲学の危険性」について、コロサイの兄弟姉妹たちに警告していました。彼らの周りにどういった危険が実際に存在しているのか、彼らがいったい何に注意を払うべきなのかをはっきりと伝えていたのです。

▶「注意しなさい」

8節はこのように始まっていました。「あのむなし、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。」「注意しなさい」とパウロははっきりと口にしていました。この「注意しなさい」ということばは「気をつける」とか「警戒する」とか「用心する」という意味が含まれています。気をつけるのです。慎重になるのです。警戒するのです。

ここで、このことばに関して覚えてほしいことが二つあります。一つは、私たちが持っているこの日本語の聖書では、「注意しなさい」ということばは文の最後に使われていましたが、元々のギリシャ語では、文の一番初めに用いられているということです。6、7節で「彼にあって歩みなさい」とずっと語ってきたパウロは、8節でまず言うのです。「注意しなさい」と。8節はそんな強い命令で始まっています。言い換えると、パウロはただなんとなく兄弟姉妹たちに「危険に対して気をつけていなさいね」と言いたかったのではなく、「細心の注意を払い続けていなさい」と警告していたのです。「兄弟たち、最大の注意を払っていなさい。」と。「あのむなしだましごとの哲学のとりこにならないように」と。またもう一つは、この「注意しなさい」ということばに現在形が用いられているということです。これまでももう何度も触れてきましたが、現在形というのが何を意味していたのか覚えていますか？現在形というのは、その動作、状態の継続を表していました。つまりパウロはここで、彼らがただ一度だけ注意を払うのではなく、気が向いたときだけ注意を払うのでもなくて、「いつも、注意を払い続けているように」とそう求めていたのです。「兄弟たち、気を抜いてはいけません。どんなときも警戒を怠らず、常に対応できるように」と。この「注意しなさい」ということばの二つの要素を考えただけでも、いったいパウロは、どれほど兄弟姉妹に迫っていたその危険が深刻なものだと考えていたのでしょうか。間違いなく、彼はにせ教師たちのもたらす教えがどんなに大きな影響もたらすのかをよくわかっていました。現実の危険がそこにあるということを理解していました。

▶「だれのとりこにもならぬよう」

また続けて、パウロはこのようにも言っていましたね。「だれのとりこにもならぬよう」と。この「とりこになる」ということばには「略奪する」とか「戦利品や捕虜として持ち去る」といった意味が含まれています。何かを略奪するのです。強奪するのです。戦利品や捕虜として持ち去るのです。少し思い浮かべてみてください。戦いに勝利した軍隊がいます。その軍隊が、敗北した国に入って行ってそこを占領して、その国の財宝や持ち物などを奪い去っていく様子。人々を捕虜や奴隷として連れ去っていく様子。このことばはそういったものを表しているのです。パウロはそんなコロサイの周りにある危険というものが、どれだけ深刻なものかをわかっていました。もちろん、ここで彼らが実際、物理的に

どこかに連れ去られていくというような話をしていたのではありません。そうではなくて、キリストに立ち続けようとする彼らが、キリストにあって歩み続けようとする彼らが、間違っただけによってそこから離れていってしまうこと、真理ではなくて偽りの奴隷として連れ去られていってしまうこと、その危険を彼はひどく懸念していたのです。皆さん、偽りの教えというのは、いのちや救いをもたらすものではありませんでした。むしろ、いのちや救いの源であるキリストから遠ざけるものだったのです。だから、パウロは厳しく警告していました。「いつも、注意を払っていなさい」「気をつけていなさい」と。「だれひとりとして決して真理から道を踏み外して、キリストから離れていくことがないように」と。

▶「哲学」

ここまで見てきて、パウロのその深刻さ、熱心さというものがわかると思いますが、でも、ある人はまだ思っているかもしれません。・ ・ ・ どうしてパウロはそんなにも心配していたのですか？なぜそんなに彼らに熱心に警告していたのですか？と。その人はもう一度よく8節を見てください。パウロのことばは続いていました。彼らに迫っている危険がいかに巧妙なものであるのかをこう口にするのです。

「あのむなしい、だましごとの哲学によって」と。ここで注意してほしいのが、この「哲学」ということばです。「哲学」と聞けば、何か複雑な学問とか議論を思い浮かべるかもしれません。でも、当時はそのようなものではありません。ここで用いられていた「哲学」ということばは、元々二つのギリシャ語「愛する」を意味する“フィロ”と「知恵」を意味する“ソフィア”がくっついてできているのです。つまり「哲学」ということばを訳して簡潔に言えば、「知恵を愛すること」「知恵に対する愛」を表しているのです。だから「哲学」と聞いて、すぐに複雑な学問などを思い浮かべるのではなくて、ここでは知恵に対する愛を話しているというのです。このような哲学や知恵を、聖書はすべて否定しているわけではありません。例えば箴言の中では、人々が知恵を大切にすること、知恵を愛するということが良いことなのだとして繰り返し教えられているのです。箴言4：6－8にはこう書いています。「知恵を捨てるな。それがあなたを守る。これを愛せ。これがあなたを保つ。知恵の初めに、知恵を得よ。あなたのすべての財産をかけて、悟りを得よ。それを尊べ。そうすれば、それはあなたを高めてくれる。それを抱きしめると、それはあなたに誉れを与える。」と。ですから私たちが見てわかるように、箴言も知恵を愛することを教えています。また箴言だけでなく、数週間前に見たコロサイ2：3のところでもパウロ自身も「イエス・キリストのうちにこそ、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」と宣べていました。知恵が、イエス・キリストのうちにはあるのです。ですから、みことばもパウロも知恵自体を愛することを問題視していたのではありませんでした。でも、同時にパウロが危険視していた知恵もありました。パウロが危険視していた哲学もありました。それこそ、神様やみことばを取り除いた、人の考えに基づく哲学でした。神様やみことばを取り除いた人の考えに基づく哲学や知恵、それを危険視していたのです。S・ルイス・ジョンソンという先生も、このように哲学に関してわかりやすく説明してくれています。「もし哲学というものが、現実全体に関する明瞭さと理解を求めることを意味するのであれば、クリスチャンはある意味で哲学しなければなりません。しかし、その探求においては常に神様の啓示の光の導き、制限、批評に従わなければなりません。もし哲学というものが、神様の啓示を尊重することなく、人間の基本的な疑問に関して、人間的な思案を行うことを意味するのであれば、間違いなくクリスチャンはそんな哲学を自分の人生や使命からできる限りなくそうとしましょう。」何を言わんとしていたのか分かりますか？ジョンソン氏のことばは、まさにパウロがここで教えていた事でもありました。哲学自体が問題なのではありません。神様やみことばに基づいていろんなことを考えること、そんな知恵は喜ばれるものです。でも神様を除いた、みことばを除いた、ただ、人の考えに基づくような哲学、考え、教え…そのようなものは、すべてむなしいものでした。どんな考えやどんな教えであろうとも、神様やみことばをそこから取り出してしまえば、それはすべて価値のないものでした。ここで用いられていた

「むなしい」ということばは、「空っぽ」とか「中身の無い」という意味があります。空っぽなものだからこそ、この「哲学」というものは何の価値もないのです。また「だましごと」ということばもありました。これは「惑わし」とか「誘惑」とか「欺き」というような意味があります。

そこで皆さん、よく考えてください。「哲学」はさっき見たように、中身が一切ないものでした。実質のないものでした。でも、それにも関わらず、いろんな形で人々を惑わし、だまそうとするのです。みことばや神様を取り除いた考えや教えというものは実質がないにも関わらず、人々を簡単にだまそうとするというのです。まるで魚をだますルアーのようなものかもしれません。釣りに用いるルアーというのは、小魚に似ているものも、ミミズに似ているものも、いったい何なのかわからないようなものもあります。ほんとにいろんな形や色のものがあります。でもどれにも共通しているのは、それらは本当の餌ではないということです。そこにいのちもなければ、おまけにだれが見てもわかる大きな針がくっついていたりします。素人が見れば、こんなおかしなものにどんな魚が食いつくのかと思います。でも、何の味もしない、中身もない、生きてもないそんなものに魚はだまされて、食いついたら最後、吊り上げられてしまうのです。人による知恵や哲学もこれと同じでした。人生のいろいろな疑問やいろいろな質問に対して、あたかもすばらしい解決策を与えているかのように思えたとしても、何かすばらしい教えのように聞こえたとしても、真の神様に基づいていない、それは実質何の価値もないものでした。

以前、ある番組の中でこんなやりとりがありました。何人かのお坊さんに対して「なぜ、私たちは生きているのでしょうか？」「人生の意味は何でしょうか？」といった質問がなされたのです。それに対してひとりの人が次のように答えていました。よく聞いてください。「自分は何のために生まれてきたのか」これを明らかにするヒントが、自分の好きなこと、自分に向いていることにあると思います。人間は、自分のことを一番よく知っているのは自分だと思いがちなんですが、実はそうでもないんですよ。自分の周りにはいる、自分の大好きな人、自分のことをいつも大切にしてくれる人ほど、自分のことをよくわかってくれていたりするんです。そういう人に、『私って何が得意なんでしょうか？私、何したらいいんでしょうか？』と素直に相談してみることも、自分の生きる道、自分の生きている意味を見つけるヒントになんじゃないかな、と思っております。」そしてこうも言います。「正解は、死ぬまでわからないかもしれません。」・・残念ながらまことの神様を除いてしまえば、それはまさに全く中身の無い空っぽなものでした。「何のために生まれたのかのヒントは、自分の好きなことにあります。正解は死ぬまで分かりません。」などということは、聖書は一つも教えていません。むしろ聖書を見ればはっきりと、人はみな創造主である神様によって造られて、そしてその神様の栄光を現すために生きているのだ、と教えられているのです。イザヤ43：7にもこう書いていました。「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」と。いろんな間違った考えはあります。でも私たちが聖書を見るときに、聖書ははっきりと、私たちが何のために生きているのかということもすべて教えてくれているのです。正解は死ぬまで分かりません、などと無責任なことをみことばは教えてはけません。でも、「むなしいだましごとの哲学」人の考えというのは、このようにことば巧みなものによって人をだまし、そして何よりも人をキリストや神様から遠ざけようとするのです。正解はわからないから、そのままいろんなことをしながら学んでいけばいいですよと、間違った希望を与えるのです。そこに中身はないのに、ことば巧みに人を惑わし、本当に必要な真理ではなくて、むなしいものへ、そして滅びに至るものへと心を奪われるように欺いていくのです。その危険性をパウロはよくわかっていました。真理の源であるキリストを中心から取り除いてしまえば、そこには何も残らないのだということを理解していました。だから彼は信仰者に対して厳しく警告していたのです。「そんなむなしいものにだまされてはいけません。注意してなさい」と。どうして

パウロはそんなにも心配していたのか？なぜ、そんなに彼らに熱心に警告していたのか？・・・このようにことばを見ていけば、その理由が鮮明に見えてきませんか？

でもパウロはこれでことばを終えていたのではありませんでした。彼はさらにことばを付け加えて、危険性を説明していたのです。8節の後半部分にこうありますね。「それは人の言い伝えによるもの、この世の幼稚な教えによるものであって、キリストによるものではありません。」ここでパウロは「むなしいだましごとの哲学」について、特にその根源がどこにあるのかについて触れていました。人をだますその偽りの教えが、いったいどこからやって来ているのかを教えているのです。特に二つのことばに注目してみてください。

▶「人の言い伝えによるもの」

一つは「人の言い伝えによるもの」というこのことばです。この「言い伝え」ということばには、「受け継がれてきた教え、伝統」といった意味が含まれています。要するにこの「哲学」というのは、長年にわたって代々人々の間で語り継がれてきたものになるのです。勘違いして欲しくないのは、覚えていますか？先週私たちが見たコロサイの教会が信じ受け入れていたキリスト・イエスに対する信仰、それも同じように人々の間で長年受け継がれてきた伝統だ、とそう言いました。一日、二日で考えられたものではなくて、そのようにして伝わってきたものだったのです。その源には神様がいました。神様がその真理の生みの親、源だったのです。でも、ここでの伝統というのはそのようなものではありませんでした。その源には、神様ではなくて、人がいました。教えを生み出していたのは、人間だったのです。ジェームズ・ダンという註解者もこのように説明しています。「コロサイ教会の設立の基盤となった伝統は、神によって認証されたものでした（イエス・キリストは神の知恵であり奥義でもありました）。それに対し、その伝統を無視するような『哲学』は、どんなものであろうと人間が起源のものとしか考えられません。」私たちが周りを見渡せば、いろんな宗教、いろんな考え、いろんな哲学があります。でもそういったものの始まりが間違っているから、だからその教えはどこまでいっても空っぽなものでした。すべての知恵と知識が隠されているキリストの真理は、いつも十分で揺るがないものでした。たとえば、賢い人やいろんなことを成し遂げた人であったとしても、知識や知恵に限りのある、人によって生み出された教えというものは、いつも不十分で不確かなものでした。だからこそ、そんな人の言い伝えによる伝統が、神様のことばに取って代わるなどということは、絶対あってはならないことだったのです。思い返してみれば、イエス様もそのことをよしとはされていませんでした。覚えていますか？パリサイ人たちがやって来て、イエス様に質問していたのです。マルコ7：5「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えに従って歩まないで、汚れた手でパン食べるのですか？」と質問してきたパリサイ人や律法学者に対して、主はこう答えられました。マルコ7：8-9にこう書いています。「8 あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている。…9 あなたがたは、自分たちの言い伝えを守るために、よくも神の戒めをないがしろにしたものです。」と。パリサイ人たちが抱えていた問題、それは、人の伝統を守るために神様の戒めをないがしろにするようなことでした。彼らの抱えていた問題は、人の言い伝えというものを優先し、神の戒めを捨てていたことにもあったのです。

そして皆さん、このようなパリサイ人たちが抱えていた問題というのは、その当方で終わったわけではありません。今も変わっていません。人々は神様のことばよりも、だれかほかの人のことばに信頼して聞き従おうとすることがあるのです。こんなことばを聞いたことあるかもしれません。「かつて、ある偉い人がこう言っていました。」「ある人がこのように教えていました。」と。このように人に焦点が当たって、神様やキリストのことばに目を向けようとしていないことがあるのです。こうした人の伝統は、人の考えや命令が神様よりも上にきて、みことばに取って代わる危険性をはらんでいるものでした。ですから、パウロは「注意しなさい」と言ったのです。

▶「この世の幼稚な教えによるもの」（2017年版「この世のもろもろの霊によるもの」）

それに加えて二つ目にパウロはこうも言っていましたね。「この世の幼稚な教えによるもの」と。これを聞いて今？を浮かべている人がいるかもしれません。というのも、2017年版の聖書は、この部分が「この世のもろもろの霊によるもの」と訳されているのです。この世の幼稚な教えを言っているのか、それともこの世のもろもろの霊の話をしているのか、いったいどっちなのでしょう？そもそも、この表現は何を意味しているのでしょうか？正直に言いますが、この部分に関しては非常に理解するのが複雑で、実際に聖書註解者の中でも多くの議論がなされています。今週、私自身も時間かけて考えてみましたが、理解するのは難しすぎました。でも少なくとも、ことばの意味などを踏まえて言えることがいくつかあります。

まず、このことばの意味自体を考えてみると、「幼稚な教え」と訳されているギリシャ語には元々、「基本的な原則」「学びの基礎となるもの」といった意味が含まれています。どういうことか？例えば私たちが国語の勉強をするとしましょう。国語の勉強をする上で、最も基本的な最も基礎的なものになるもの、それは、ひらがなですね。ひらがなを知っていないと、読むことも書くこともできなければ、何も始まりません。ここで言う「幼稚な教え」ということばにもその意味が含まれているのです。当たり前前にだれもが知っているような、一番初めに習うそんな基礎的なものです。あまりにも初歩的なものです。だからこれと同じことばをヘブルの著者もこのように用いています。ヘブル5：12「あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。」と。ですから、「幼稚な教え」ということばを、パウロがこの意味で用いていたとしてもおかしくなかったでしょう。むなしい、人によって生み出された哲学や、人の言い伝えによるものがあまりにも初歩的なものであるからこそ、あまりにも簡単すぎるものであるからこそ、霊的に成熟した者にとっては、到底それを真剣には取れないのです。幼稚なものに思えるのです。そんな教えを受け入れるということは、その人にとって愚かなことでしかありませんでした。マッカーサー先生もこのように言われています。

「むなしい哲学のために聖書の真理を放棄することは、博士号を取得した後に幼稚園に戻るようなものです。」と。幼稚園に教えるために戻るのではありません。幼稚園で再び幼児たちと一緒に学ぶために戻るのです。聖書の真理を放棄して、むなしい哲学に行くということは、そういったものだ。博士号を取得した後に幼稚園に戻って幼児と一緒に学びをすることなんて絶対ありえないと思いませんか？この世の哲学はそんなものだということです。パウロがここで言わんとしていたことを、それほど幼稚な教えだからだまされないようにしなさい、という意味で読み取ることも、当然できるのです。

でも同時に、これに加えて別の意味も考えることができます。少し考えてみてください。この初歩的なこの世の哲学というのは、確かに人によって生み出されたものであるからこそ、空っぽなもの、無価値なものでした。でも果たしてそのような教えは、すべて、人によってのみ生み出されたものなのでしょう？そうではないのです。神様やみことばを取り除こうとする教えの背後には、この世の霊の働き、何よりサタン・悪魔の働きが存在しているのです。そのうちに、真理のない偽り者であり偽りの父であるサタンは、今もなお、私たちを真理から遠ざけるために働き続けています。そしてその影響を、この世のあらゆる宗教や哲学は受けているのです。だから皆さん、確かにいろんな宗教や哲学やいろんな考えがあるのはわかるのですが、そういったものの根底を考えてみれば、そこにはいつも何があるか？そこにはいつも、私たちの目をいのちや救いの本当の源であるキリストから引き離して、それ以外の何かに向けさせようとする力が働いているのを私たちは見るのです。みことばは教えていました。イエス様は言われていたのです。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」(ヨハネ14：6) 罪人である私たちはみな、ただキリストとのみわざによってのみ救いが与えられるのだ、というそのすばらしい約束を聖書は私たちに与えてくれていました。でも、そんな真理を取り替えて、「狭い門から入りなさい。」と言われている

るものを取り替えて、いろんなものをみんなが勝手に選択して、結局どの道も天へと繋がっている、救いへと繋がっていると教えているのです。そのようにして人々を惑わすのです。「イエス・キリストが道であり、真理である」と言われているにもかかわらず、それを取ってしまって、あたかも私たちにあるような選択肢があるかのように、だましごとの哲学は私たちを惑わすのです。だからこういったものは、まさにキリストによるものではありませんでした。ただ人々に破滅をもたらす忌み嫌うべきものだったのです。パウロは、そんな空っぽの哲学の危険性というものをよくわかっていました。コロサイの兄弟姉妹たちが何の価値もないようなそんな言い伝えや世の哲学、世の教えによって惑わされないように。惑わされること、ましてや神様やキリストから遠ざかってしまうような愚かな哲学というものから、何が何でも離れないといけないと、そう注意していたのです。だから、パウロは厳しく警告を与えていました。「愛する兄弟たち、最大の注意を払っていなさい。あのむなしいだましごとの哲学のとりこに決してならないように。中身はないけど、でもそれはいろんな形であなたをだますかもしれないから、どんなときも警戒していなさい」と。

そして、これは彼らだけの話ではありません。今の私たちにとっても同じです。私たちの目を、福音の真理やキリストから引き離そうとする、そんなサタンの働きが終わったわけではありません。今も変わらずにあります。ですから私たちは、私たちが見るテレビや新聞やいろんなネットの記事の中に、キリストから離そうとする力が働いているのを見るのです。神様を除いて、みことばを妥協して、その歩みを妨げようとする危険は、実際に存在しているのです。私たち自身もそういった中身の無いものにだまされてはいけないということです。

でも、ある人はこう思うかもしれません。・・危険があることはよく分かりました。それが人々をだます巧妙なものであることもよく分かりました。では、どうしたらそんな危険から自分を守ることができるのでしょうか？もちろん、パウロはその答えも教えてくれました。彼はコロサイの教会に対してただ警告を発しただけで、あとは自分たちが考えて対処しなさいと突き放していたのではなかったのです。

2. 満ち満ちたキリストの“安全性” 9-10節

では、いったいどのようにパウロは彼らを助けようとしていたのか？9-10節にこう書いています。「:9 キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。:10 そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。」と。パウロがしていたこと、それは非常にシンプルでした。危険が迫っている彼らの目を、ほかのだれでもないキリストに向けていました。これがきょうの二つ目のポイントです。空っぽの哲学の危険性を警告しただけではなくて、パウロは満ち満ちたキリストにあるその安全性に関してもここで触れていくのです。パウロはまず9節でこう宣べていました。「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。」と。ここで用いられていた「宿っています」ということばですが、これには「いつまでもその土地に住む」とか「定住する」といった意味が含まれています。いろんなところを放浪して移り住んでいくのではなくて、ある一つの場所に落ち着いてそこに留まり続けることをいうのです。またそれに加えて、この「宿っています」という動詞自体にも現在形が使われていました。要するに、これは一時的に宿っている、という話ではなくて、その状態が終わらない継続的なものであるということを表しているのです。

ですから、ここでパウロが強調したかったことというのは明白でした。人として来られた御子イエス・キリストのうちには、紛れもなく神様のご性質が宿り続けている、ということです。キリストは、ある時点で神様で、ある時点では神様でなくなったということはありませんでした。キリストは人として来られる以前は存在しておられなかったのでもありません。この方はすべての初めから、どんな時も変わることなくいつも完全な永遠の神様として存在しておられるお方でした。もちろんそのことに関し

ては、みことばも繰り返しはつきりと教えています。例えばヨハネ 1 : 1 - 2 にこう書いていました。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」と。いったいこの「初めに神とともにあって神であったことば」というのは、だれのことを指しているのでしょうか？ 続く 14 節でこのように言われていました。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」と。初めからあった神であることば、それはほかのだれでもない人としてこの地上に来られた神の御子イエス・キリストでした。またヨハネだけではありません。パウロ自身も繰り返し、繰り返しそのことを教えていました。私たちが見ているこのコロサイの中でも、彼は続けて宣べていたのです。もうすでに何回も見てきました。例えば、コロサイ 1 : 15 には「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。」 17 節にも「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」 19 節でも「なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、」と書いています。間違いなく御子はすべての初めから存在する完全な神様でした。この方は単なる歴史上において優れた教師のひとりでもなければ、預言者でもありませんでした。御使いのひとりでもなければ、限りなく神様に近いようなそんな存在でもありません。イエス・キリストは疑いようもないまことの神様でした。神様を神様たらしめるそのありとあらゆるご性質が、このキリストのうちに満ち満ちていたのです。

だから皆さん、改めて思い返してみてください。かつてイエス様がこの地上を歩まれていたその時、周りの人々も、この主のうちに神様にしかできない、到底ありえない力があるのだということを何度も何度も目にしていたのです。例えば、ひどい嵐にあって今にも溺れかけているような時、弟子たちは、自然さえも支配する主の全能の力というものを目の当たりにしました。マタイ 8 : 26 - 27 にこうありました。「:26 イエスは言われた。「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちだ。」それから、起き上がって、風と潮をしっかりとつけられると、大なぎになった。:27 人々は驚いてこう言った。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」弟子たちはその歩みにおいて繰り返し、繰り返し神様の力を見続けていました。でも、これは何もイエス様の弟子たちに限ったことではありません。イエス様の敵たちさえ同じでした。彼らも主の力、例えば罪を赦す権威をイエス様が持つておられることを目の当たりにしたのです。マルコ 2 : 5 - 7 にこんな場面が描かれていました。「:5 イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。あなたの罪は赦されました」と言われた。:6 ところが、その場に律法学者が数人すわっていて、心の中で理屈を言った。:7 「この人は、なぜ、あんなことを言うのか。神をけがしているのだ。神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。」その通りでした。神様以外に罪を赦すことができる者はいないのです。でも、これに対してイエス様はこのように言われていたのです。マルコ 2 : 10 で「「人の子が地上で罪を赦す権威を持つていることを、あなたがたに知らせるために。」」と。イエス様はご自身の力を示しておられました。今挙げたものがすべてではありません。ほかにも全知であることや、恵みやあわれみに富んでおられること、義や聖さや死にまさる力を持つておられることなど、ありとあらゆる力やご性質をイエス様のうちに私たちは見て取ることができるのです。ですから、立ち止まってよく考えてみてください。私たちが愛しているこのイエス・キリストは、ほかの人と比べてちょっとだけ知恵や知識があるそんな存在ではありません。ほかの人と比べて少しだけ権威や力を持つているお方でもありません。この方のうちにこそ、知恵と知識のすべてがありました。ほかのだれも決して及ぶことのないすべてにまさる力がこの方のうちにありました。キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿り続けているのです。

そして皆さん、何より凄いのは、私たちはこのお方において、必要な助けや必要な救いのすべてを見出すことができるということです。続く 10 節でパウロはこう宣べていました。10 節「そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。」よく流れを考えてみてください。まず、キリストのうちに神の満ち満ちたご性質が宿っていて、そしてそんな神で

あるキリストにあって、私たちは満ち満ちているというわけです。私たちは、神であり、すべての支配と権威のかしら、すべてにまさるそんなキリストのうちにあって、罪の赦しや救いを、また歩みに必要な力や知恵や励ましをすべて見出すことができるということです。十分なキリストにあって、すべてであるキリストにあって、必要は十分に、すべて満たされるのです。あのペテロも同じようなことを口にしていました。Ⅱペテロ1：3「というのは、私たちをご自身の栄光と徳によってお召しになった方を私たちが知ったことによって、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与えるからです。」私たちが今話しているのは、結局のところ何の中身もない空っぽの世の宗教や哲学とは違います。文字どおり、すべてにまさる、すべてを持っておられる方において、私たちは救いや信仰の歩みに必要なすべてのものを手にすることができる、というわけです。キリストを信じ受け入れた者たちは、だれでも同じです、コロサイの教会も今を生きている私たちも、もうすでにそんな最高の存在を、そんな喜びの源である満ち満ちたキリストというのを知りました。すべてのすべてであるそのお方を私たちは知ったのです。でも、もしある人がそんなお方を知っていながら、そのお方をみずから取り除いて、何か別のものに満足を見出そうとしているのであれば、すべてに満ちた私たちに満足を与えることのできるそのお方を知っていながら、何の中身もない世の何かと取り替えようとしているのであれば、どう思います？すべてのすべてがあるお方を知っていながら、何の中身もないそんなものと取り替えようとしているのであれば、それは到底おかしなことなのだ、とパウロは教えていたのです。コロサイの兄弟姉妹たちに言いたかったことは、そういうことでした。「あなたたちはすでに、すべてのすべてであるキリストを得たのだから、そのキリストにあって歩み続けていきなさい。それ以外のあなたに何ももたらさないものから、離れていなさい。そういったものにだまされないように。」と愛を持って兄弟姉妹たちに教えていたのです。

よく皆さんも自分の歩みを振り返ってみてください。果たして私たちはこのキリストにあって、満足を見出し続けているのでしょうか？罪からの救いを唯一与えることができるこのお方にあって、喜びを見出し続けているのでしょうか？この主のみことばに立ち続けているのでしょうか？それとも、このキリストやみことばを何かと取り替えて、空っぽなものの中に満足や喜びを見出そうとしていないのでしょうか？すべてにおいて十分なお方を日々、私たちはどれだけ熱心に求めているのでしょうか？忘れてはいけません。キリストのうちに、私たちに何よりも必要な救いがあります。知恵や助けや力のすべてが、この方のうちに存在しています。この満ち満ちたキリストが私たちに本当に満たしてくださるのです。そうであるのに、そのキリストから離れるというのであれば、それはまるで、砂漠にオアシスがあったとしても、そのオアシスからみずから離れて砂漠の中で飢え渴きに苦しみ続けるようなものです。

ですから、もしまだこのイエス・キリストのすばらしさを知らない方がいるなら、自分の救い主として、主として信じ受け入れていない方がいるなら、どうかきょうこの方を受け入れてください。自分の罪を悔い改めて、神様以外の何の価値もないものを追い求め続けてきたその生き方をやめて、キリストを愛し、この方のために生きてください。本来であれば、罪ゆえに神の御怒りを受けて永遠に滅ぼされて当然のそんな私やあなたのような罪人のために、十字架にかかって死んでくださった方の偉大なあわれみを知ってください。

このキリストをすでに受け入れているという兄弟姉妹の皆さん、私たちは時に、信仰生活において、悲しいながらキリスト以外のものに目を奪われて、罪を犯してしまうことがあります。日々の歩みにおいて、キリストにある満足から私たちの目を奪うものとの戦いは常にあります。別のものに満足を見出すように、といった誘惑も多々あります。でもそんな時こそ、思い返すことです。私たちが愛しているそのイエス・キリストがいったいどんなお方かを、です。キリストこそ、世界に存在するありとあらゆるものを造られた創造主でした。主の主、王の王でした。この方のうちに、知恵と知識のすべてがあって、ほかのだれも決して及ぶことのないすべてにまさる力がありました。キリストのうちにこそ、神の

満ち満ちたご性質が形をとって宿っているのです。愛する皆さん、私たちにとって、このキリストとそ
のみことばだけで十分です。すべてのすべてであるこのお方がおられるなら、私たちにとってそれはす
べてです。こんなすばらしい本当に価値ある宝を手にしたのであれば、この主にあって力強められなが
ら、与えられた信仰の歩みを、最後まで忠実に歩み続けましょう。